

持田ヶ浦古墳群2

——D群6~9号墳の調査——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第445集

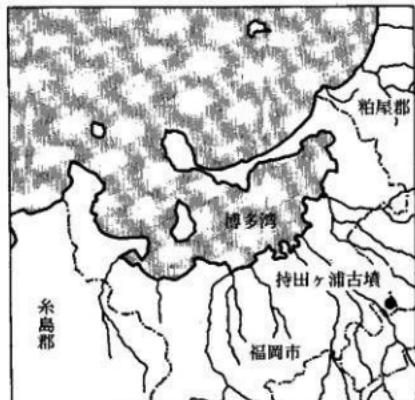
1996

福岡市教育委員会

Mo tta ura
持田ヶ浦古墳群2

—— D群6~9号墳の調査 ——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第445集



遺跡名 MTKD-2
調査番号 9310

1996

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口として栄えた福岡市には、多くの文化財が分布しています。本市では文化財の保護、活用に努めていますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書はそうした遺跡のひとつで、博多区持田ヶ浦古墳群内の共同住宅建設に先だって行った発掘調査の成果報告書です。

発掘調査の結果 4基の古墳と、28基の貯蔵穴を始めとする弥生時代の遺構、遺物が見つかり、多くの貴重な成果を得ることができました。

発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた株式会社新陽を始めとする多くの方々にたいし、心からの感謝をいたしますと共に、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に先だって、福岡市教育委員会が1993年5月24日～7月31日にかけて行なった持田ヶ浦古墳群D群第2次調査の報告書である。
2. 検出した遺構については、古墳については第1次調査他で確認されている1～5号墳に続けて6号墳より番号を付した。その他の遺構は記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本書では、この番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡1、溝2のように記述する。
3. 本書で使用する方位は磁北である。
4. 本書で使用した遺構実測図は宮井善朗、是田敦、平田こずえ、今泉博子、東真一、古屋俊英、本田浩二郎、田中大介が作成し、田出橋和男、奥田弘子、内山和子が補佐した。製図は宮井、熊塙御堂和香子の他林由紀子の協力を得た。
5. 本書で使用した遺物の実測図は宮井の他熊塙御堂和香子、東哲志、樋口公美子、平田こずえが作成した。また製図は宮井、熊塙御堂の他林由紀子の協力を得た。
6. 本書使用の写真は宮井が撮影したものである。
7. 遺物実測図の括弧内の番号は収蔵時の登録番号である。
8. 本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。
9. 本書の執筆、編集は宮井が行なった。

本文目次

I.	はじめに	
(1)	調査に至る経緯	1
(2)	調査体制	1
II.	遺跡の立地と歴史的環境	3
III.	調査の記録	
(1)	概要	6
(2)	弥生時代の遺構と遺物	6
	住居跡	
	土壙、貯蔵穴	
(3)	古墳時代の遺構と遺物	10
	6号墳	
	7号墳	
	8号墳	
	9号墳	
	土壙墓	
(4)	小結	27

挿図目次

F i g. 1	持田ヶ浦古墳群周辺の遺跡 (1 : 250000)	2
F i g. 2	調査地点図 (1 : 4000)	4
F i g. 3	調査区周辺地形図 (1 : 600)	5
F i g. 4	住居跡11実測図 (1 : 60)	7
F i g. 5	弥生時代土壙、貯蔵穴実測図 (1) (1 : 30, 1 : 60)	8
F i g. 6	弥生時代貯蔵穴実測図 (2) (1 : 60)	9
F i g. 7	弥生時代貯蔵穴実測図 (3) (1 : 60)	10
F i g. 8	貯蔵穴土層断面実測図 (1 : 60)	11
F i g. 9	土壙、貯蔵穴出土七器実測図 (1) (1 : 4)	12
F i g. 10	貯蔵穴出土土器実測図 (2) (1 : 4)	13
F i g. 11	弥生時代石器実測図 (1 : 2, 1 : 4)	14
F i g. 12	6号墳墳丘、主体部実測図 (1 : 100, 1 : 40)	16
F i g. 13	7号墳墳丘実測図 (1 : 100, 1 : 60)	17
F i g. 14	7号墳石室実測図 (1 : 40)	18
F i g. 15	7号墳出土土器実測図 (1 : 4)	19
F i g. 16	8号墳墳丘平面図 (1 : 100)	20
F i g. 17	8号墳墳丘断面図 (1 : 60)	21
F i g. 18	8号墳石室実測図 (1 : 40)	22

F i g. 19	9号墳墳丘、主体部実測図 (1 : 100、1 : 40)	23
F i g. 20	6、7、8、9号墳出土遺物 (1 : 4)	24
F i g. 21	土壤墓10実測図 (1 : 30) 出土遺物実測図 (1 : 4)	25
F i g. 22	各古墳出土石製品、金属製品実測図 (1 : 2)	27

図版目次

- PL. 1 (1) 弥生時代遺構全景 (東から)
(2) 弥生時代遺構全景 (南から)
- PL. 2 (1) 土壌1 (西から)
(2) 住居跡11 (北から)
- PL. 3 (1) 廉藏穴3 (南から)
(2) 廉藏穴5 (北から)
- PL. 4 (1) 廉藏穴5 遺物出土状況 (南から)
(2) 廉藏穴7 土層 (東から)
- PL. 5 (1) 廉藏穴7
(2) 廉藏穴9
- PL. 6 (1) 廉藏穴9 遺物出土状況
(2) 廉藏穴12 土層 (西から)
- PL. 7 (1) 廉藏穴14 土層 (西から)
(2) 廉藏穴14 (東から)
- PL. 8 (1) 廉藏穴14 遺物出土状況
(2) 廉藏穴21
- PL. 9 (1) 廉藏穴22
(2) 廉藏穴22 遺物出土状況
- PL. 10 (1) 廉藏穴27
(2) 廉藏穴31
- PL. 11 (1) 6～9号墳 (東から)
(2) 6号墳全景 (南から)
- PL. 12 (1) 6号墳主体部 (西から)
(2) 6号墳紡錘車出土状況 (北から)
- PL. 13 (1) 7号墳全景 (南から)
(2) 7号墳主体部 (南から)
- PL. 14 (1) 7号墳石室遺物出土状況 (東から)
(2) 8号墳全景 (南から)
- PL. 15 (1) 8号墳石室 (南から)
(2) 9号墳全景 (南から)
- PL. 16 (1) 土壌墓10 (南から)
(2) 上壌墓10 遺物出土状況 (南から)

I. はじめに

(1) 調査に至る経緯

1992年11月4日付けで、株式会社新陽より、老齢者を対象としたケア付共同住宅建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地はかつて福岡市の依頼で別府大学により調査された持田ヶ浦古墳群D群に隣接しており、埋蔵文化財課では審査願いを受けて93年3月18日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には新たに古墳が発見され、石室も遺存していることが判明した。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなつた。発掘調査は、株式会社新陽との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなり、1993年5月24日に着手し、7月31日に終了した。

(2) 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉（前） 尾花 剛（現）

調査総括 埋蔵文化財課 課長 折尾学（調査年度） 荒巻輝勝（整理年度） 第2係長 山崎純男
(調査年度) 山口讓治(整理年度)

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 吉田麻由美（調査年度） 西田結香（整理年度）

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査作業 蒲池雅徳 田出橋和男 三浦力 川島平八郎 山口守人 永川カツエ 本多ナツ子 嶋ヒサ子 内山和子 奥田弘子 村上エミ子 山本后代

調査補助 是田敦（福岡大学） 平田こずえ 今泉博子（別府大学） 東真一 本田浩二郎 田中大介 占屋俊英（熊本大学）

整理作業 熊埜御堂和香子 石津玲子 田中依里 竹田千代 大石加代子 林由紀子 小森佐和子 土斐崎つや子 堂岡晴美 太田順子 谷口美由紀 森田めぐみ 東哲志（福岡大学） 橋口公美子（九州大学） 平田こずえ

また調査時には株式会社新陽、金隈病院、日本国士開発株式会社には多くのご配慮を賜った。また埋蔵文化財課の白井克也氏、松村道博氏及び両氏担当の現場作業員の諸氏には多忙時の応援をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

遺跡調査番号	9310	遺跡略号	MTKD-2
調査地地籍	福岡市博多区大字金隈字持田ヶ浦212-5外		
開免面積	4,866m ²	調査対象面積	4,866m ²
調査期間	1993年5月24日～7月31日	分布地図番号	12-B-1



- 1.持田ヶ浦古墳群D群
- 2.萱場古墳群
- 3.立花寺古墳群
- 4.熊野古墳群
- 5.七曲古墳群
- 6.金剛山古墳群
- 7.桜ヶ丘古墳群
- 8.岩長浦古墳群
- 9.観音浦古墳群
- 10.ウソフキ古墳群
- 11.影ヶ浦古墳群
- 12.堤ヶ浦古墳群
- 13.立花寺B遺跡
- 14.持田ヶ浦古墳群A群
- 15.持田ヶ浦古墳群B群
- 16.持田ヶ浦古墳群C群
- 17.持田ヶ浦古墳群E群
- 18.持田ヶ浦古墳群F群
- 19.今里不動古墳
- 20.御陵古墳群
- 21.中古墳群
- 22.宝満遺跡
- 23.宝満尾東遺跡
- 24.天神森遺跡
- 25.下月隈A遺跡
- 26.下月隈B遺跡
- 27.上月隈遺跡
- 28.下月隈C遺跡
- 29.立花寺遺跡
- 30.金隈遺跡
- 31.影ヶ浦遺跡
- 32.仲島遺跡
- 33.井相田C遺跡
- 34.井相田A遺跡
- 35.麦野C遺跡
- 36.麦野A遺跡
- 37.南八幡遺跡
- 38.高畠遺跡

Fig. 1 持田ヶ浦古墳群周辺の遺跡 (1 : 25000)

II. 遺跡の立地と歴史的環境

持田ヶ浦古墳群は福岡平野の東側を画する月隈丘陵上に位置する。月隈丘陵は四王寺山から博多湾に向かって西北に伸びる丘陵である。東側を宇美川、西側を御笠川によって開析されている狭長な丘陵である。丘陵裾部には多くの舌状丘陵が派生しており、特にこの上に多くの遺跡が残っている。今回報告と関連の深い弥生時代、古墳時代について概観してみたい。

弥生時代前期の遺構としては、壺棺墓、土壇墓などの埋葬遺構、貯蔵穴などが検出されている。その中で近年調査された天神森遺跡では、弥生時代前期前半頃からの墓地が検出されており、現時点でも最も遅い例であろう。前期後半頃には貯蔵穴を主体とする遺跡が調査されており、宝満尾遺跡(前期後半、11基)、影ヶ浦遺跡(前期後半、中期末から後期初頭、総数56基)、今回調査の持田ヶ浦D群等で相当数の群集が見られる。なおそのほかの遺構は未検出であったが、今回調査で貯蔵穴群に伴う住居跡が確認された。

弥生時代前期末から中期にかけての壺棺墓地は各地で多く調査されている。前期末から後期初頭にかけて350基近くが調査された国火跡金隈遺跡が代表的であるが、この他にも上月隈遺跡(中期前半から末、20基)、下月隈B遺跡(中期後半から後期初頭、21基)、席田青木遺跡(中期後半から後期初頭、150基)等、大きな群をなす例が多い。また金隈遺跡で119基、上月隈遺跡で6基など土壇墓群を伴う遺跡もあり、壺棺墓に先行すると推定されている。また後期の土壇墓、石壇墓、石蓋土壇墓は宝満尾遺跡等で検出されており、宝満尾遺跡4号土壇墓には異体字銘帯鏡が副葬されていた。また中期以降の集落についても丘陵北部を中心に多く検出されている。中期後半頃から後期にかけて盛行する遺跡が多く、久保園遺跡では中期後半の大形建物、赤穂浦遺跡では銅鐸鉄型、大谷遺跡では銅鏡片や青銅製鋤先が出土するなど、拠点集落としては福岡平野部の那珂、比恵遺跡に比べて遜色のない内容を持っている。

古墳時代においては、集落遺跡についてはよくわかっていないが、古墳の調査が各所で行われている。前期古墳の調査例はないが、かつて持田ヶ浦古墳群の南側に分布する御陵古墳群において三角縁神獣鏡が出土しており、首長墓が存在したことが推定される。この他に4から5世紀代の古墳についてはよくわからない点が多い。5世紀後半～6世紀初め頃には月隈丘陵北部において、貝花尾1、2号墳、犬神森1、2号墳などが築造される。これらの古墳は単独もしくは2、3基からなる古墳で、群集墳を形成しない。今回の調査地点に隣接する持田ヶ浦古墳群D群1号墳も該期の古墳の内の一つと考えることができよう。6世紀後半から6世紀初め頃からは福岡平野の各地、特に平野南部の丘陵地、また早良平野を取り囲む丘陵地に非常に多くの古墳からなる群集墳が形成される時期である。月隈丘陵での該期の状況はと言えば、今回調査の持田ヶ浦古墳群(A群からF群)や堤ヶ浦古墳群、影ヶ浦古墳群が比較的近接した地域に集中して築造される他は、顕著な群集墳を形成しない。特に前代において単発的ではあるが古墳の築造が見られた丘陵北部においては該期の古墳は少ないのである。また該期には持田ヶ浦古墳群に近接して、首長墓と考えられる今里不動古墳が築造されており、まさに分布中心が丘陵南部に移動したかのような様相を示している。

以上のように月隈丘陵の弥生、古墳時代について概観してきたが、実際のところ今だ不明な点が多い。分布図を見ればわかるように平野部の遺跡に比べて範囲の狭い遺跡が多いのは地形によるところのみではなく、遺跡に関する情報が少ないせいであろう。近年大規模に行われた席田青木遺跡など分布図の範囲外で発見される遺跡も多い。今後のチェックを慎重に行う必要のある地域と言えよう。

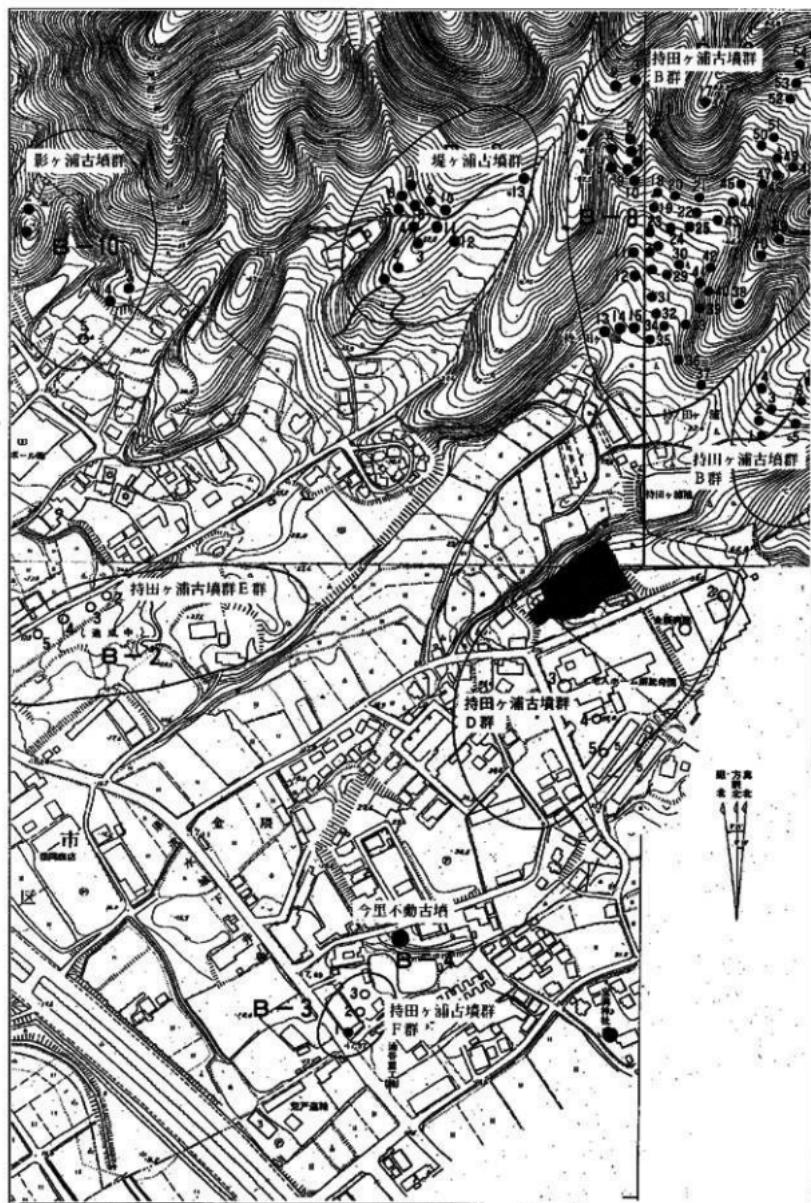




Fig. 3 調査区周辺地形図 (1 : 600)

III. 調査の記録

(1) 概要

持田ヶ浦古墳群D群2次調査では弥生時代前期の住居跡、土壙、貯蔵穴などの弥生時代遺構と、4基の古墳、1基の土壙墓の古墳時代遺構が検出された。このうち弥生時代遺構は偶然試掘時のトレンチに全く掛かっていなかったため、予定外の手間と時間を要する結果となった。しかし古墳については当初の予想より遺存が悪いものであった。なお汗顔の至りであるが、整理スペースの不備から発掘現場から現場へと遺物を持ち歩かざるをえない事情により、移動中に箱数にして5箱程度の遺物の行方がわからなくなってしまった。従って本報告が調査の全容を伝えるには不備な点が多いが、報告書作成年度の関係もあり、概報としてあえて報告するものとする。残余の遺物については発見次第機会を得て報告することとしたい。

(2) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代遺構としては住居跡1基、土壙1基、貯蔵穴28基を数える。また出土遺物は総じて遺存が悪く、調整が明らかでないものが多い。

住居跡11 (Fig. 4) 7号墳の西側で検出した。方形の住居跡である。一边3.2mほどを測る。床面には柱穴は無く、壁溝内の小穴で柱を支えたものと考えられる。壁溝内ピットは各コーナーと、相対する辺の対応する位置にそれぞれ穿られたものと考えられる。現存する出土遺物は図化に耐えないと、調査時の所見と、遺構の性格から、貯蔵穴群と大きく隔たる時期とは考えられず、弥生時代前中期～中期初頭の所産であろう。

土壙1 (Fig. 5) 弥生時代遺構群の西端近く、7号墳周溝の北側で検出した。梢円形を呈する土壙である。底面からやや浮いた状態で小形の壺形土器が伏せられていた。長0.8m、幅0.7mを測る。出土遺物 (Fig. 9) 1が土壙1出土の上器である。やや小形で器高に比して口径の大きい壺である。口径端部は坦面をなす。刻みは見られない。胴部はあまり張らない丸みを持って底部に至る。底部には焼成後の穿孔が施されている。器面が荒れているが、ハケメ調整が確認される。口径16cm、器高10.5cmを測る。

貯蔵穴 (Fig. 5～7) 貯蔵穴は全部で28基検出した。類似した形状のものが多いので、Tab 1に表示した。形態の分類は、削平の状況などをとりあえず無視して、相対的に浅いもの(深さ180cm未満)をI類、深いもの(180cm以上)をII類とした。ただ7号墳石室床面で検出した貯蔵穴31のみは60cm以上の削平は明らかなので括弧付きで示した。また検出面の径が床面の径より大きく円筒状または漏斗状を呈するものをA類、床面径の方が大きくフラスコ状を呈するものをB類として、二つの属性の組合せで表示した。また壁面や床面に段や掘り込みを持つものに'を付している。

出土遺物 (Fig. 9, 10) Fig. 9-2は貯蔵穴4出土の壺底部である。平底で、ごくわずかに上底状を呈する。胴部外面にはミガキが認められる。底径9.2cmを測る。3～5は貯蔵穴5出土。3は壺口縁部である。円筒状の頸部から外反しながら大きく開く口縁部を持つ。端部は丸く收める。復元口径17cmを測る。4も壺口縁である。上面に平坦面を持ち、内面にわずかに突出し、鋤先状に近い。頸部は緩やかに外反する。復元口径23cmを測る。5も壺で底部を欠く。4に類似した口縁部を持ち、頸部と胴部の境に断面三角の突帯を一条巡らすが、突帯が無ければ境界は不明瞭である。球形に近い胴部を持つ。外面はナデ調整される。復元口径23.6cmを測る。6は貯蔵穴12出土の壺底部である。胴部の立上がりがあり開かず、張りも小さいので、かなり小形になると考えられる。底径6.6cmを測

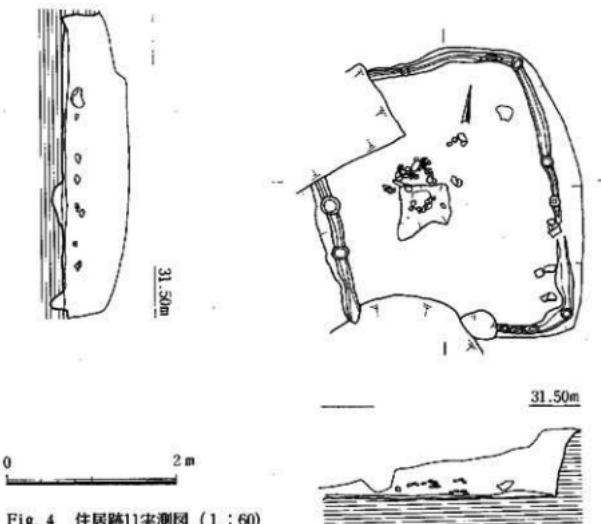


Fig. 4 住居跡11実測図 (1 : 60)

る。7は貯蔵穴14出土の壺底部である。底部はわずかに上底状を呈し、胴部はかなり大きく張る。外面ともナデ調整される。底径9cmを測る。8は貯蔵穴15出土の底部である。壺と思われる。底部は平底で、径6.4cmを測る。9は小形の壺である。口縁部は如意状を呈し、刻目を施す。胴部はあまり張らない。底部は平底である。外面はハケメ、内面はナデ調整される。口径16.5cm、器高9.2cm、底径5.8cmを測る。10は貯蔵穴21出土である。壺と考えられる。底部は平底で、ごくわずかに上底気味になる。器面荒れは極めて著しい。胴部は丸みを帯びる。底径6cmを測る。11は貯蔵穴21出土の壺である。頸部から胴部にかけての破片である。胴部は偏球形を呈し、頸部付根はかなり縮まる。頸部付根には幅の細い突帯が一条巡る。胴部最大径22.6cmを測る。12は貯蔵穴27出土の要胴部である。底部は上底気味を呈する。胴部は中位付近で若干張る。外面はナデ調整される。底径8.3cmを測る。Fig. 11-13-15は貯蔵穴9出土の上器である。13は大形の壺口縁部である。口縁端は肥厚させるが内面に甘い稜が立つのみで、段や平坦面にはならない。頸部は強く外反しながら開く。頸部付け根に断面三角の突帯を一条巡らせる。口縁下端と突帯には刻目を施す。口縁上端は遺存部が少なく刻日の有無は不明である。復元口径35cmを測る。14は大形の鉢である。口縁は如意状を呈し、端部に粘土帯を貼付して肥厚させる。口縁部下に断面三角の突帯を一条巡らす。口縁下端と突帯には刻目を施す。外面にはミガキ、口縁部内面にはハケメが認められる。口径57.5cm、器高35.6cm、器高35.6cmを測る。15は底部であるが、鉢と思われる。底径13.8cmを測る。16は貯蔵穴22出土の大形鉢である。口縁部は如意状を呈し、肥厚は無い。端部は坦面をなす。口縁下に断面三角の突帯を一条巡らせる。口縁下端と突帯に細かい刻目を施す。胴部外面はミガキ、底部付近にはハケメが認められる。口縁部内面にもハケメが認められる。口径40cm、底径11cm、器高26.6cmを測る。

弥生時代の石器 (Fig. 11) 1から3は玄武岩製の太形蛤刃石斧である。いずれも刃部、基部とも欠く体部片である。1は貯蔵穴6出土。2は貯蔵穴28出土。3は8号墳の周溝出土で、刃部は再生

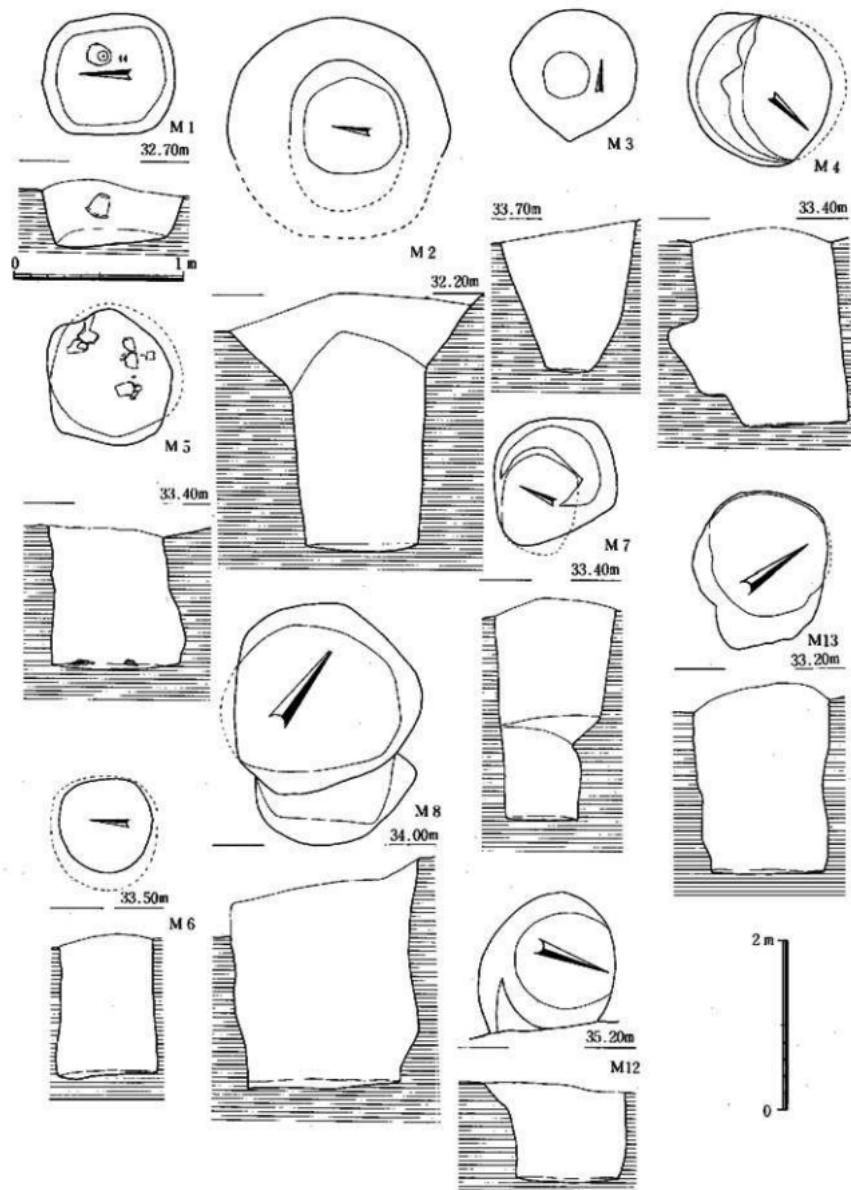


Fig. 5 弥生時代土壤、貯藏穴実測図(1) (1 : 30、1 : 60)

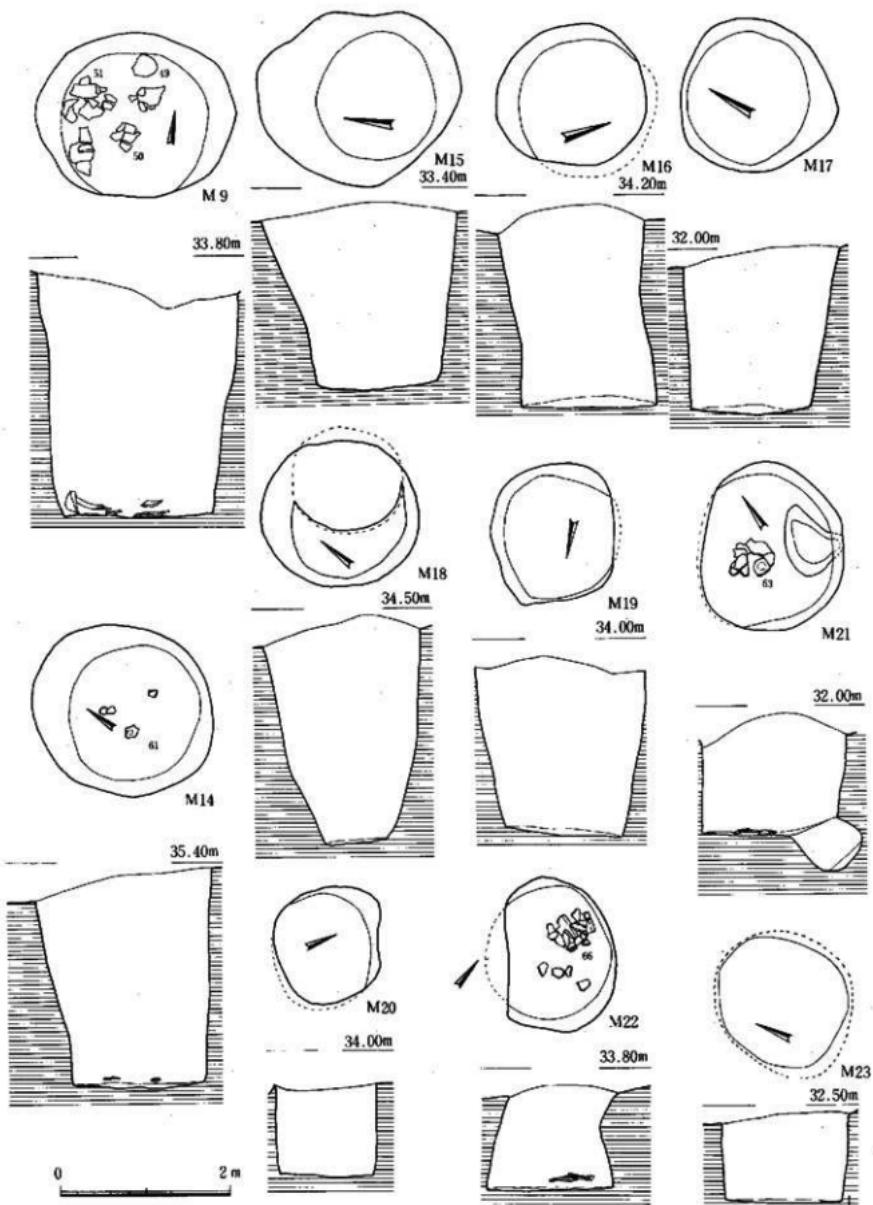


Fig. 6 弥生時代貯蔵穴実測図(2) (1 : 60)

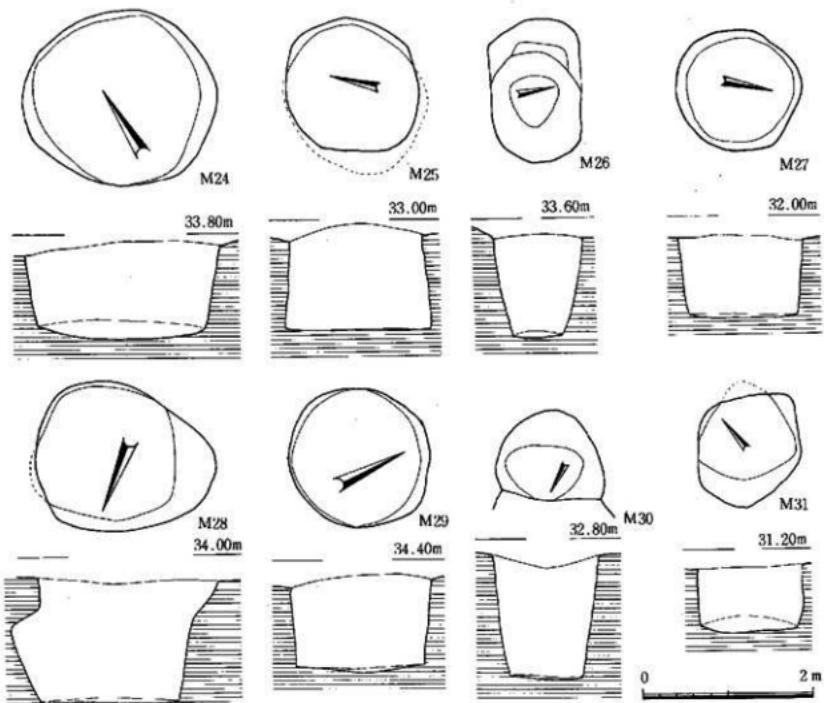


Fig. 7 弥生時代貯蔵穴実測図(3) (1 : 60)

しかけたものかもしれない。基部は遺存している。4は住居跡11出土の砥石である。上面と右側面に使用痕があるが、主に上面が使われており、置砥石である。5は貯蔵穴9出土上の石鎌である。刃部は内湾する。基部を欠く。

(3) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては4基の円墳と1基の上塙墓を検出した。古墳はいずれも墳丘をすべて削平され、周溝と破壊された石室を検出したのみである。

6号墳 (Fig. 12) 調査区の西端で検出した。南東側を削平され、北西側は調査区外にでる。周溝外縁で13mほどに復元できよう。中央部に主体部掘方を検出した。南西側に開口する横穴式石室であろうか。主軸はN-151°-Wを向く。主体部は大破しており、原位置をとどめる石材はほとんど無いものと考えられる。西側の壁際が溝状に掘り凹められており、石材を据える掘方であろう。主体部掘方の大きさは長4m、幅2.2mほどであろう。内部からは滑石製鉢車が出土した。

出土遺物 (Fig. 20, 22) Fig. 22-1は主体部出土の滑石製鉢車である。円盤と円錐台を重ねた形状である。表裏両面に文様を施す。表面は円錐台の斜面部に内部を斜格子で埋めた連続三角角を7単位巡らす。裏面は同様な三角角を6単位巡らす。径3.9cm、厚さ1.9cmを測る。

Fig. 20に図示した6号墳出土土器はすべて周溝出土である。周溝からはPL. 11-(2)に見られる

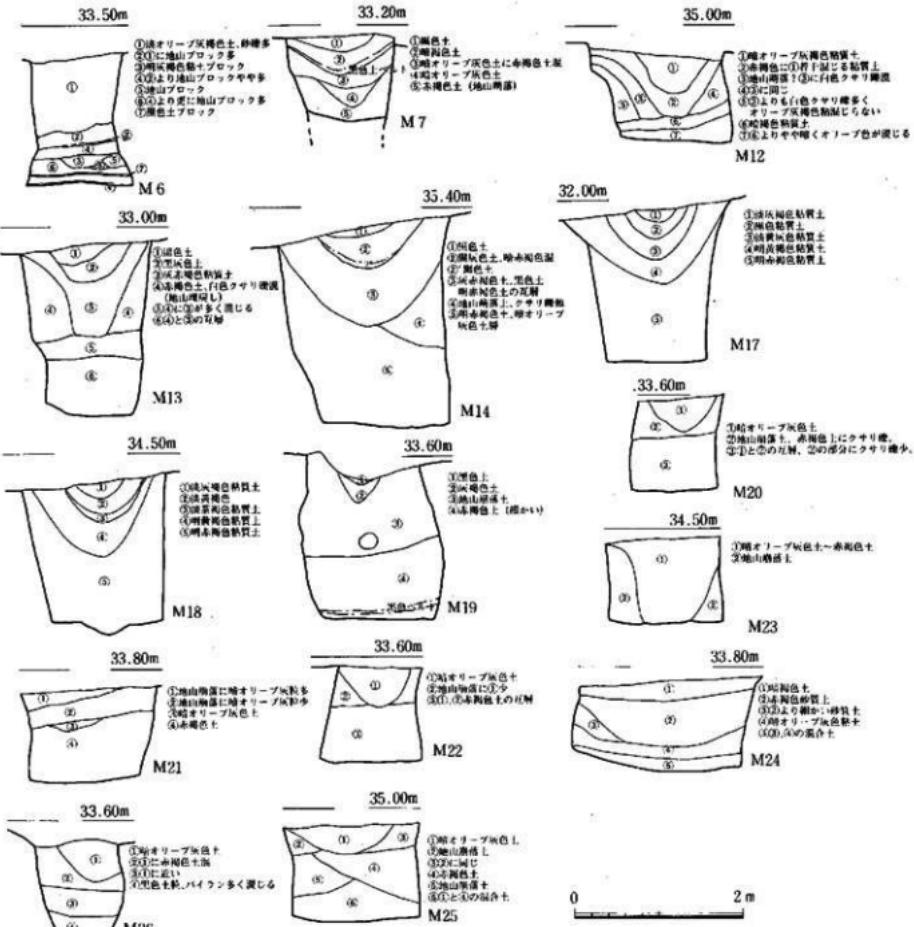


Fig. 8 貯藏穴上層断面図 (1 : 60)

ように須恵器大甕が出土しているが、現在行方がしれない。1は十師器甕である。口縁部は強く外反する。胸部は長胴で、内面はケズリ、外面は磨滅が著しいが、縱方向のハケメが認められる。復元口径19.2cmを測る。2も土師器甕である。1より小形である。口縁は直線的に開く。調整は1と同じく外面ハケメ、内面ケズリである。復元口径25.3cmを測る。3は須恵器高杯である。口縁部は内傾しながらわずかに外反する。体部外面にはカキメを施し、そのあと回転ナデで一部消している。脚部は柱状で、裾部が大きく開く。柱部と裾部の境に段状の沈線を二条巡らす。口径13.2cm、受部径16cm、坏部高4.9cm、脚端径14.4cm、器高16.5cmを測る。

7号墳 (Fig. 13) 6号墳の東側で検出した。周溝はやや方形を呈するが、円墳の範疇で考えて

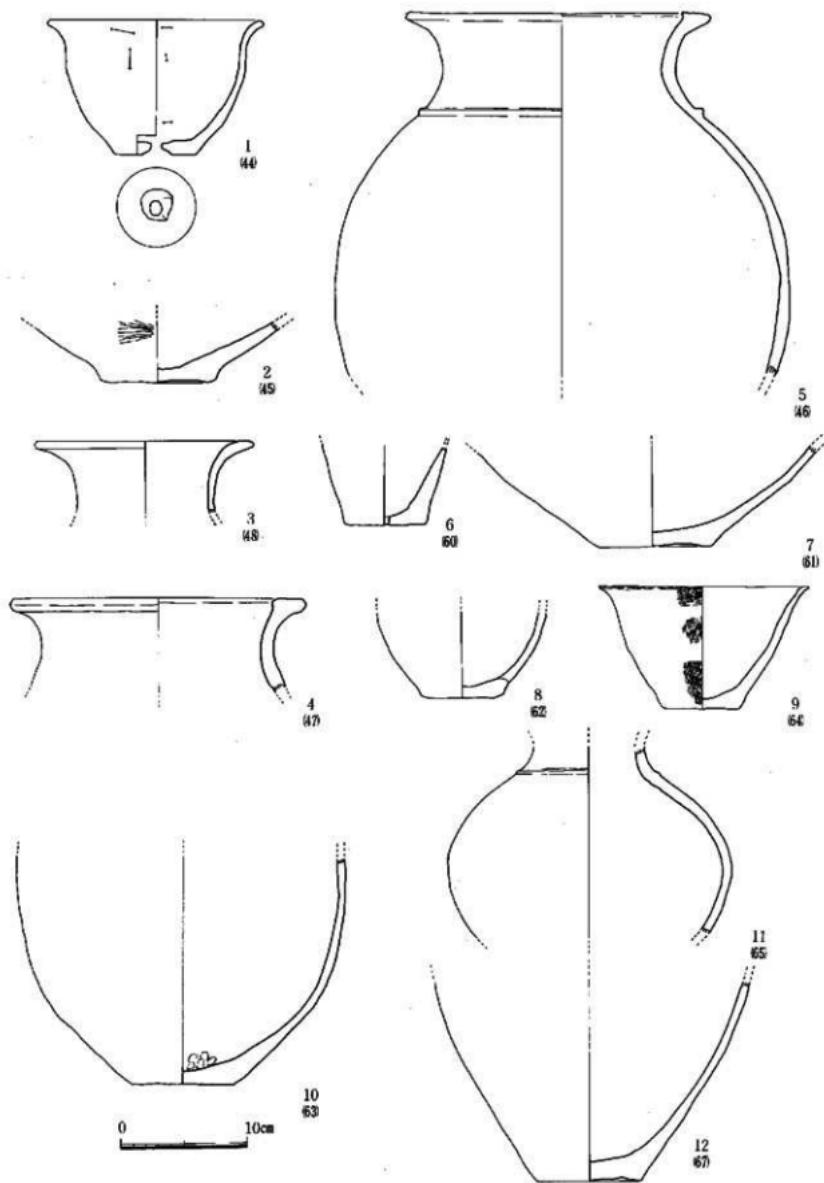
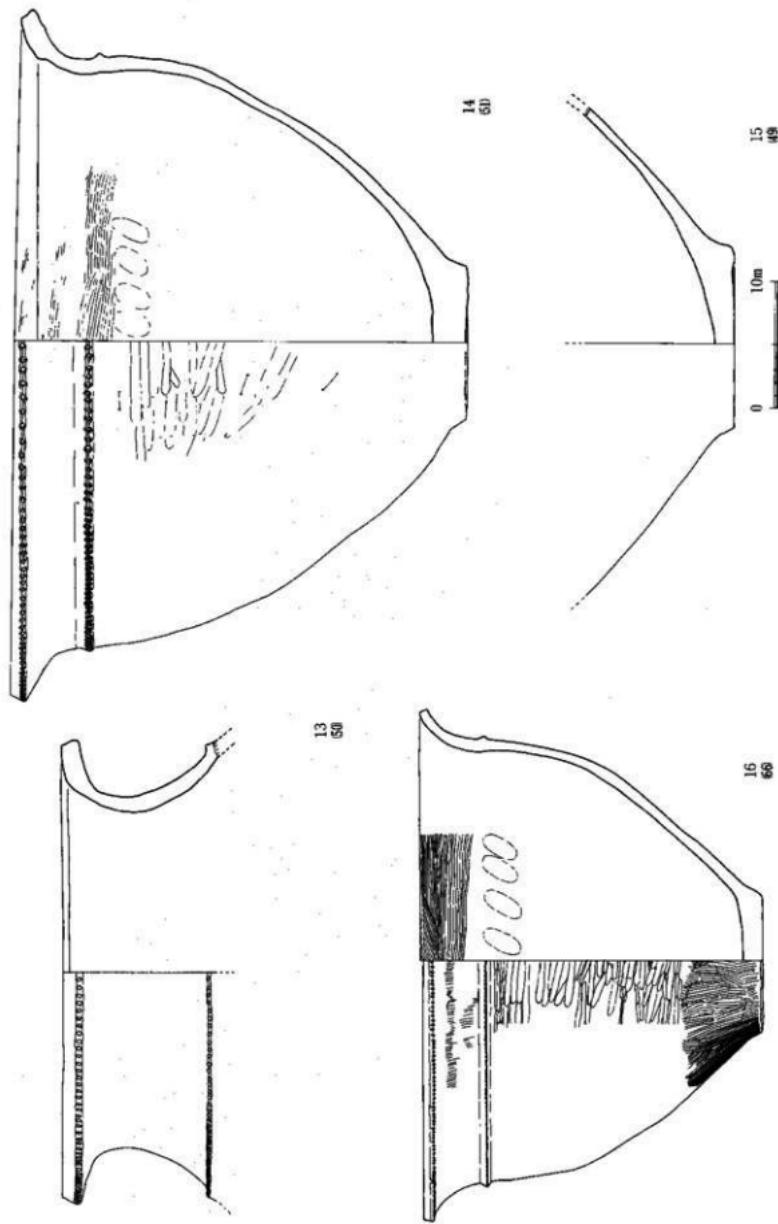


Fig. 9 土壤、贮藏穴出土土器实测图(1) (1 : 4)

Fig. 10 坟藏穴出土土器(2) (1 : 4)



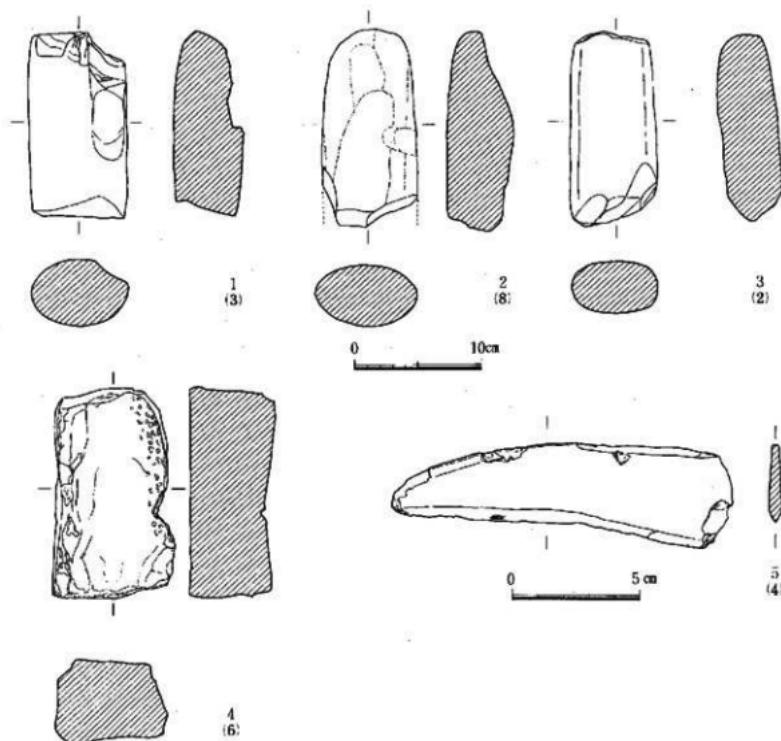


Fig. 11 弥生時代石器実測図 (1 : 2, 1 : 4)

よいであろう。南側は削平される。周溝の東側は8号墳の周溝と重複している。切り合を考慮して土層断面を精査して見たが、遺存の悪いせいもあってはっきり確認できない。径は周溝外縁で11mほどに復元できよう。

主体部は南側に開口する横穴式石室である。石室主軸はN-154°-Wを向く。ほぼ長方形と思われる掘方内に石室を組む。掘方の大きさは長5.5m以上、幅2~3.3mほどを測る。石室は奥壁及び側壁の一部の腰石が遺存する。腰石はあまり厚みの無い石材を用いている。奥壁は一枚腰石を据え、側壁との間にやや小さな石を充填する。側壁は一部しか残っていないが掘方から見て3個程度の腰石を据えたものと考えられる。埋葬面は二面と考えられる。II面では奥壁西隅で須恵器壊片が出土した。玄門近くと思われる位置から出土した壊片、壊身は出土位置から見て、初葬面であるI面に属する可能性がある。I面は全面に敷石が見られる。敷石面はほぼ長方形に分布し、この範囲が玄室であろう。まとまって出土した土器群は左袖石の内側当たりの位置であろう。敷石は奥壁側が比較的大きく、玄門側では小さめの石を用いている。敷石面から推定される石室の大きさは、長2m、幅0.6mほどと考えられる。

遺構番号	上面径 (cm)	床面径 (cm)	深さ (cm)	形態	出土遺物(登録番号)
2	262	114	296	II A	
3	146	50	176	I A	
4	166	122	234	II A'	00045
5	144	150	170	I B	00046、00047、00048
6	110	124	168	I B	10003
7	142	86	258	II A'	
8	218	210	270	II A	
9	238	174	286	II A	00049、00050、00051、10004
12	155	120	118	I A	00060
13	158	138	226	II A	
14	210	154	260	II A	00061
15	230	142	224	II A	00062
16	176	160	238	II A	
17	186	144	198	II A	
18	185	130	272	II A	
19	144	136	214	II A	
20	120	117	110	I A'	
21	198	174	144	I A	00063
22	126	146	124	I B	00064、00065、00066
23	150	160	106	I B	
24	227	195	120	I A	
25	157	168	126	I B	
26	104	57	122	I A	
27	147	126	98	I A	00067
28	210	166	150	I A'	10008
29	164	150	116	I A	
30	116	85	146	I A	
31	(122)	116	(80)	(I A)	

Tab. I 貯蔵穴一覧

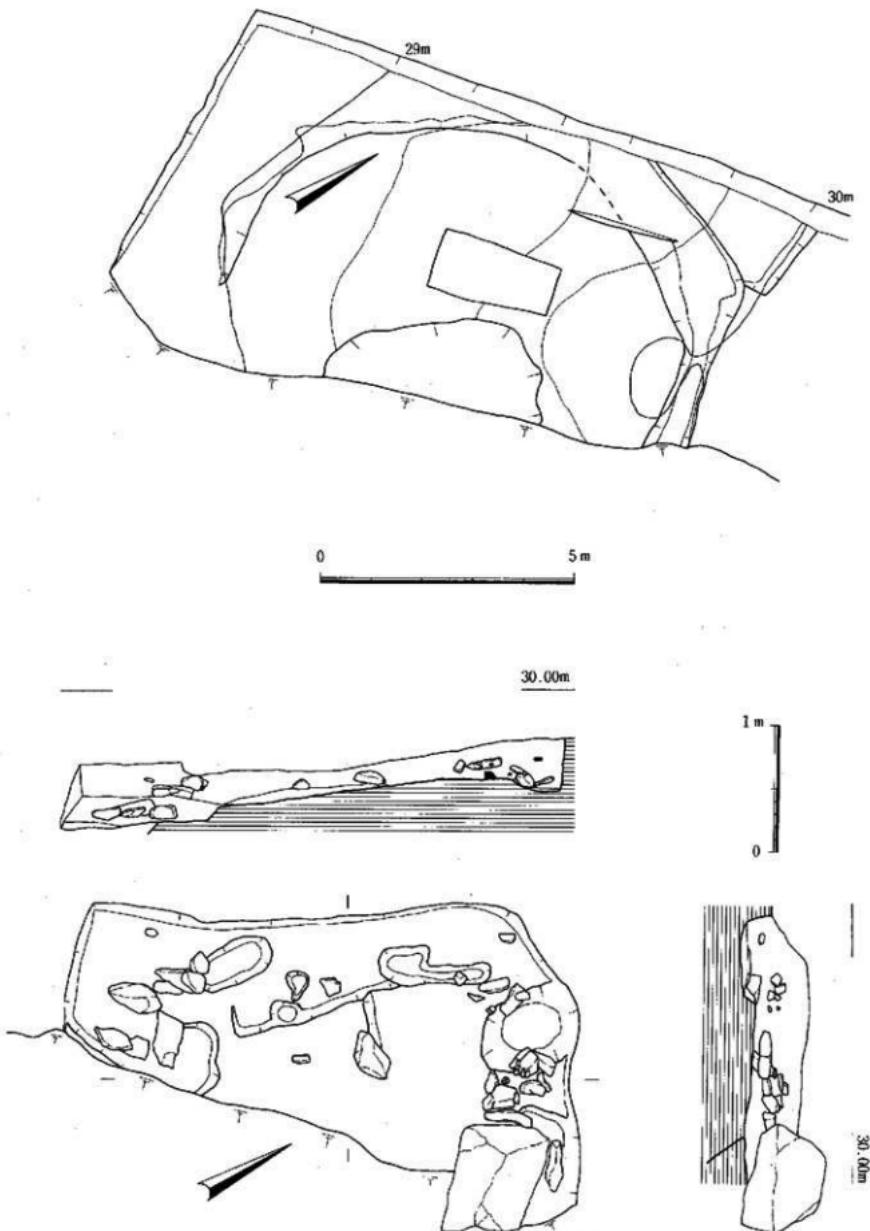


Fig. 12 6号填墳丘 主体部実測図 (1:100, 1:40)

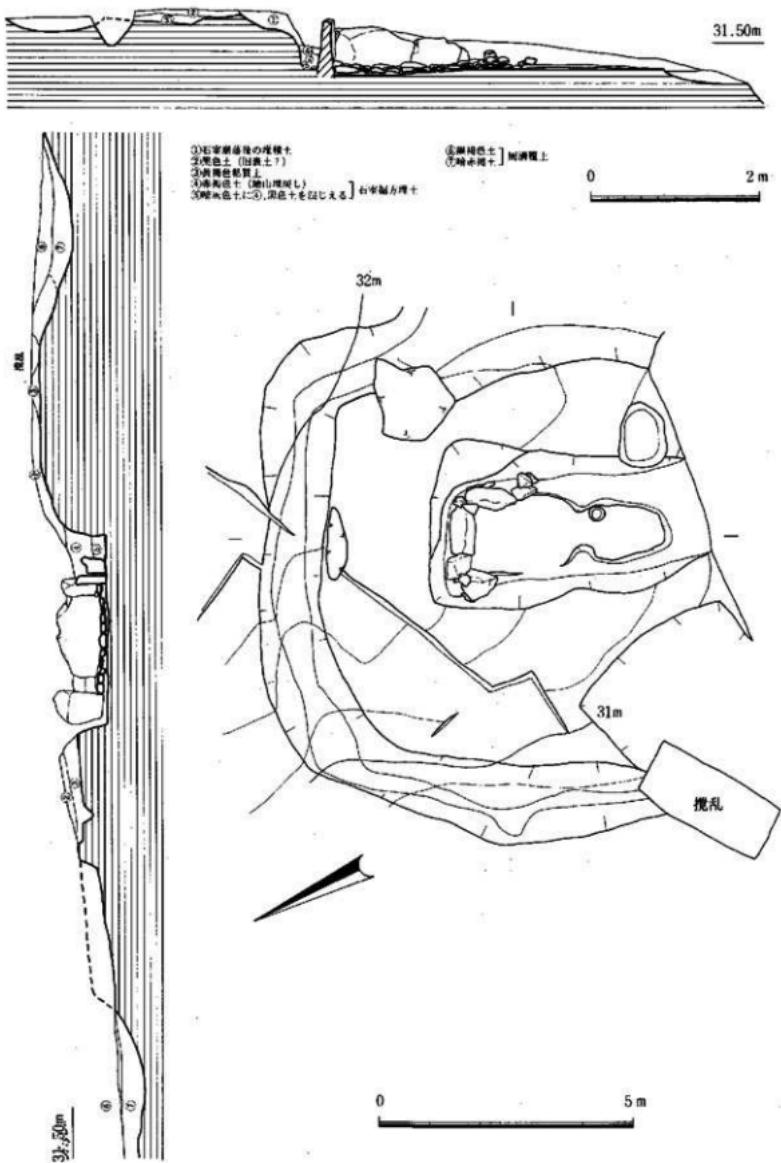


Fig. 13 7号墳 墳丘実測図 (1:100, 1:60)

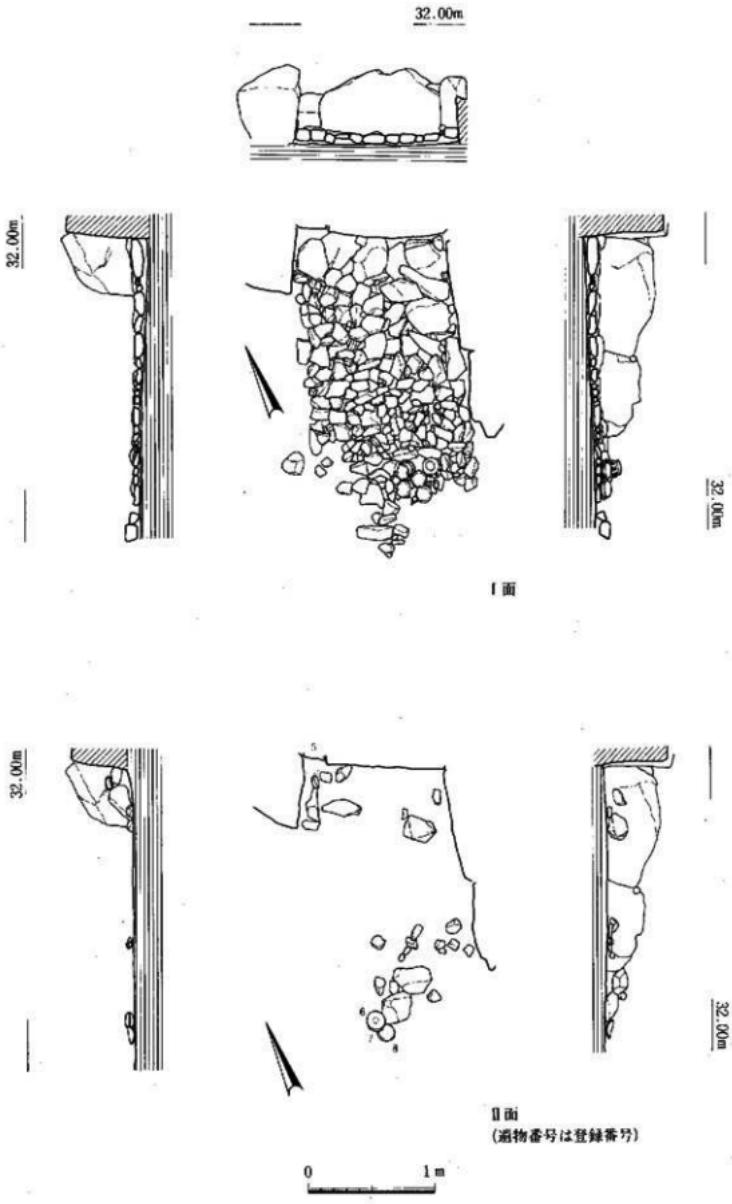


Fig. 14 7号填石室実測図 (1 : 40)

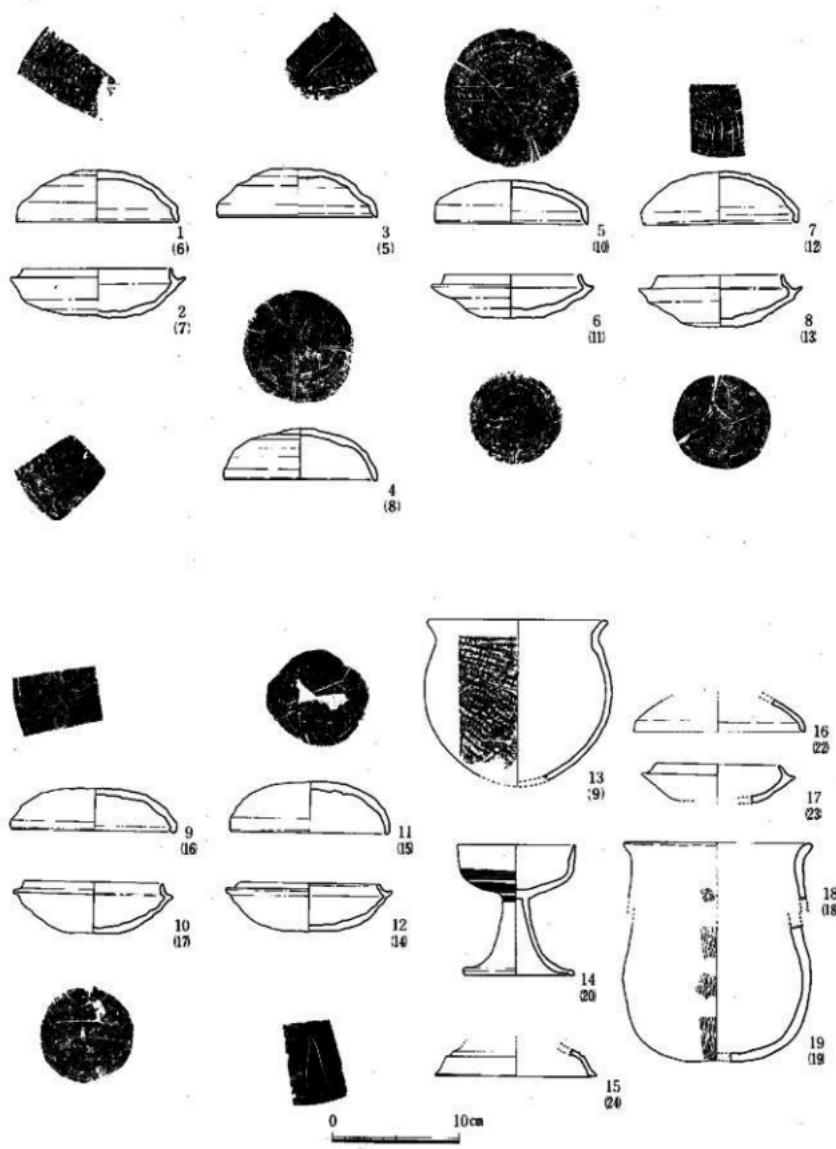


Fig. 15 7号墳 出土土器実測図 (1:4)

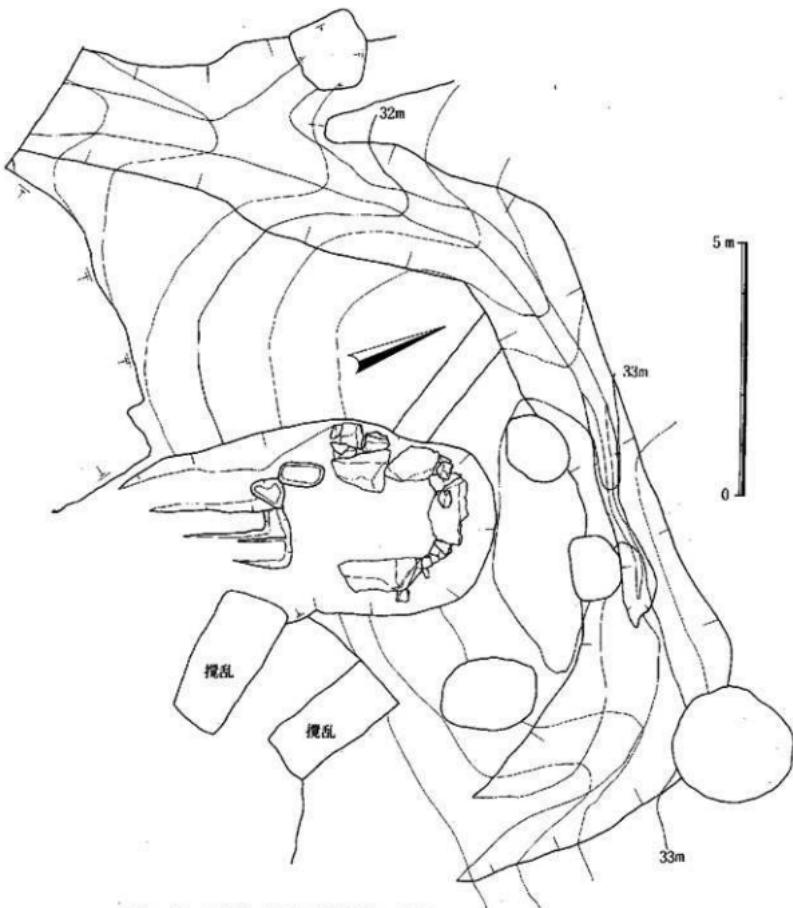
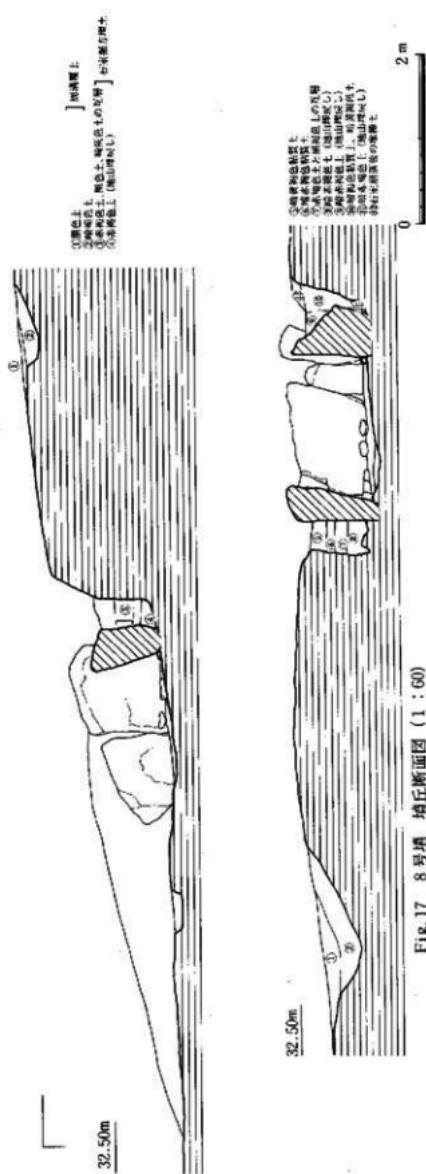


Fig. 16 8号墳 墳丘平面図 (1 : 100)

出土遺物 (Fig. 15) 3はⅡ面奥壁右隅で出土した須恵器壺蓋である。口縁端は屈曲して直立する。天井部は回転ヘラ削りを施す。口径12.4cm、器高3.8cmを測る。1、2、4は玄門付近と考えられる位置から出土した壺身、壺蓋である。1、2はセットをなす。1は壺蓋である。口縁は直立気味に屈曲する。大井部に回転ヘラ削りを施す。天井部には不定方向のナデを施す。この調整は1～4に共通する。1は口径12.5cm、器高4cmを測る。2は壺身である。口縁部はわずかに外反しつつ内傾する。口径11.4cm、受け部径13.5cm、器高3.7cmを測る。4も壺蓋である。口縁端は屈曲を見せない。口径12cm、器高4.1cmを測る。1から3は共通して松葉形のヘラ記号を持つ。8はこれと異なり、二本の平行線からなる。

5～12までの4組の須恵器壺蓋、13の上師器甕はⅠ面玄門付近で出土した一群の供獻遺物である。



— 21 —

5は器高が低く低平な器形で、口縁端が屈曲する。天井部はヘラ削り。口径12cm、器高3.4cmを測る。6は外反しつつ内傾する口縁を持つ坏身である。底部はヘラ削り。この技法は12までのいずれにも共通する。口径10.5cm、受部径12.5cm、器高3.5cmを測る。7は丸みの強い天井部に短く屈曲する口縁部を持つ。口径12.2cm、器高4cmを測る。8の坏身は体部と口縁部の境の内面を強くヨコナデし、稜を消す。口径10cm、受部径13cm、器高4cmを測る。9も低平な器形の蓋である。口縁端は短く屈曲する。口径12.5cm、器高3.4cmを測る。10、12は6、8に比べて丸みを持つ体部の坏身である。10は口径10.8cm、受部径12.5cm、器高4cmを測る。12は口径10.9cm、受部径13cmを測る。11は丸みの強い坏蓋で、他のものに比べてやや焼成が悪い。ヘラ記号には図示したとおり各種あり、Ⅱ面出土とした1~4と共通する松葉型(9、12)、二本の平行線(10、11)を含む。13は土師器甌である。わずかに外反しながら開く口縁部に球形の胴部を持つ。外面は擬格子叩き、内面は当て具痕をハケメで消したものと考えられる。

14~19は主体部覆土中の出土土器である。14は須恵器高坏である。坏部口縁は屈曲して上方へ伸びる。脚部は裾に向かって大きく広がる。坏部下半から脚部上端にかけてカキメを施す。口径9cm、脚端形8.5cm、器高10.3cmを測る。15は脚坏土器の脚端部である。凹線状の段を持つ。端部は広がり気味の坦面をなす。復元径12.7cmを測る。16は坏蓋である。口縁端部は屈曲する。17は須恵器坏身である。端部は直線的に内傾する。復元口径9.6cm、受部径12cmを測る。18は土師器甌口縁である。端部はわずかに外反する。外面にはハケメが認められる。19は18と同一個体であろうか。底部は平たく、外面には縱方向のハケメが認められる。

F i g. 20~4~13は周溝出土の土器である。4~9、11は須恵器坏蓋である。9は丸みを持つ天井部の蓋である。端部は薄く尖らせる。復元口径12cmを測る。4は復元口径10.8cm、器高3.8cmを測る。5、7、8は低平で、端部で屈曲する口縁部を持つ。7は端部に斜めの坦面をなす。復元

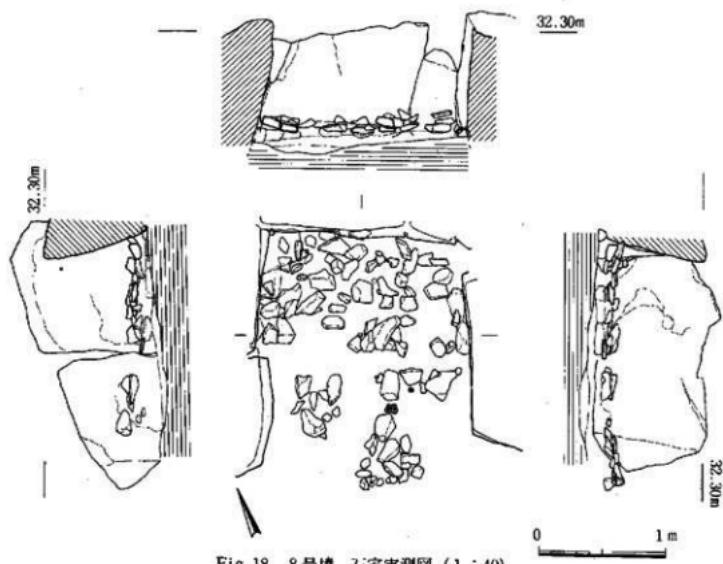
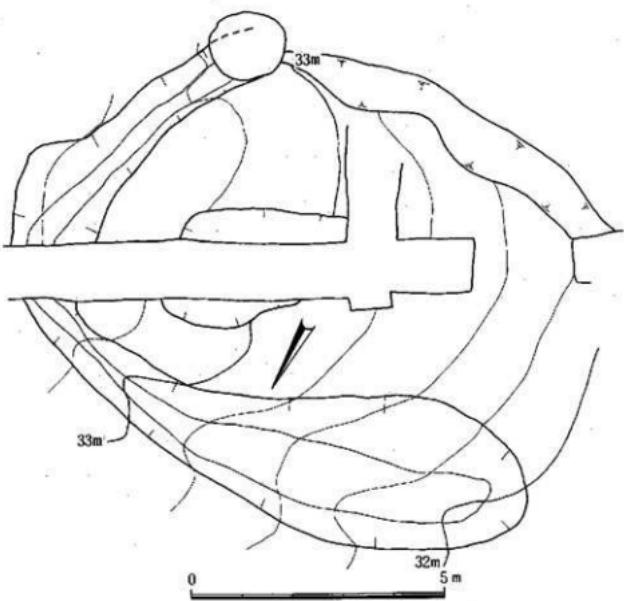


Fig. 18 8号墳 石室実測図 (1:40)

口径12cm、器高3.5cmを測る。8は復元口径12.4cmを測る。5は復元口径13cmを測る。6はかえりを持つ蓋である。かえりは受部の下位に出で、断面三角形をなす。天井部は平たい。復元口径13cmを測る。11も天井部が丸みを持つ。口縁部はわずかに屈曲する。10もかえりの形状から蓋の可能性もある。歪みが大きい。底部は平たい。完形で、口径8cm、受部径10.8cm、器高2cmを測る。12は須恵器要素である。断面方形をなす端部を持つ。13は平底である。口縁部は直線的に開く。胸部は肩が張り、最大径の部位に稜が立つ。最大径以上にカキメを施す。底部は丸みがあり、あまり安定感が無い。他の個体片が付着している。底部には回転ヘラ削りを施す。口径7.4cm、器高15.2cm、胸部最大径17cmを測る。一部自然釉がかかる。

8号墳 (Fig. 16~18) 7号墳の西側で検出した。南半分を削平される。円墳と考えられるが、北側周溝がやや直線的となる。周溝の西端が7号墳と重複するのは先述の通りである。周溝外縁で径15mほどに復元されよう。

主体部は南側に開口する横穴式石室である。石室上軸はN-156°-Wを向く。石室掘方は長楕円形を呈し、長7.5m、幅4mほどを測る。石室は奥壁と両側壁の腰石のみが残っている。奥壁の腰石は、西側に大きめの板石、東側に小形の柱状の石の2個の石材からなる。東側の側壁は奥壁のものより大きい板石が残る。奥壁との間の空間を小形の石材を充填して埋める。西側の側壁は2個の石材で、東側とほぼ同じ長さをなす。石室前面に残る石材掘方と考えられる溝状の凹みの形状から見て、もう1個分ほど南へ伸びる可能性もある。石室の大きさは現状で長1.8m、幅1.6m。南へ伸びたとすると長2.7mほどに復元される。埋葬面は二面と考えられる。Ⅰ面には散漫に敷石が見られる。床面からは須恵器片と耳環が出土した。Ⅱ面は壁際にわずかに敷石が見られる。床面からは耳環が出土した。



33.80m

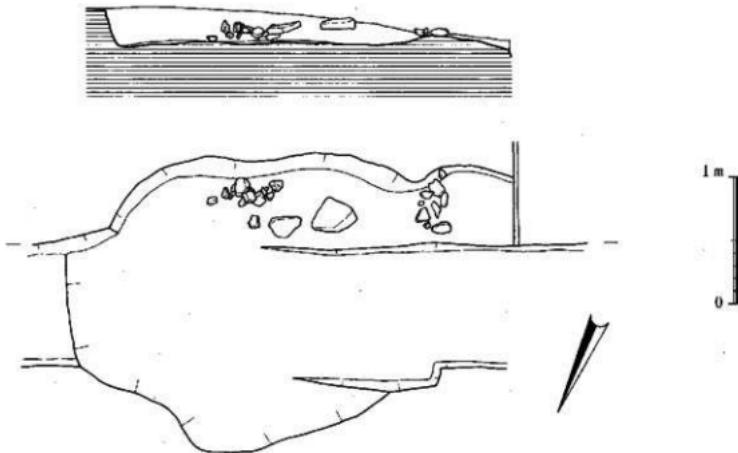


Fig. 19 9号墳埴丘 主体部実測図 (1:100, 1:40)

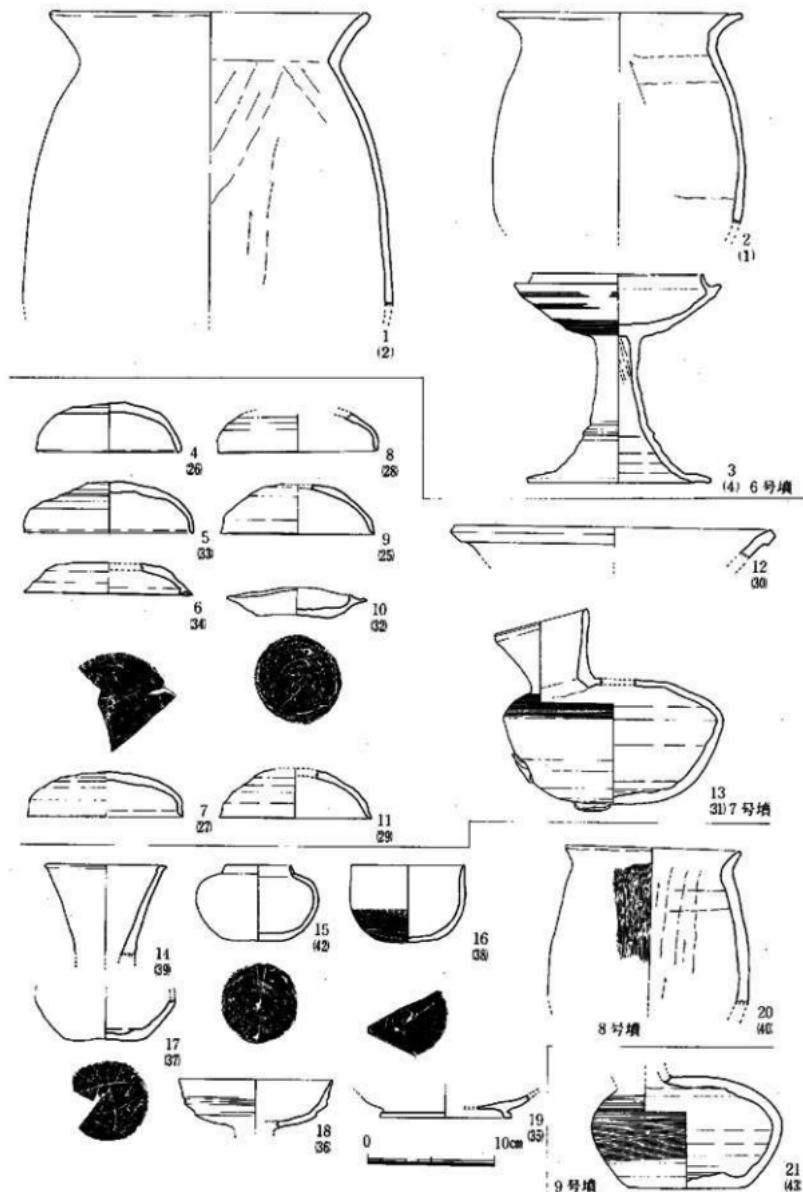


Fig. 20 6,7,8,9号出土土器实测图 (1 : 4)

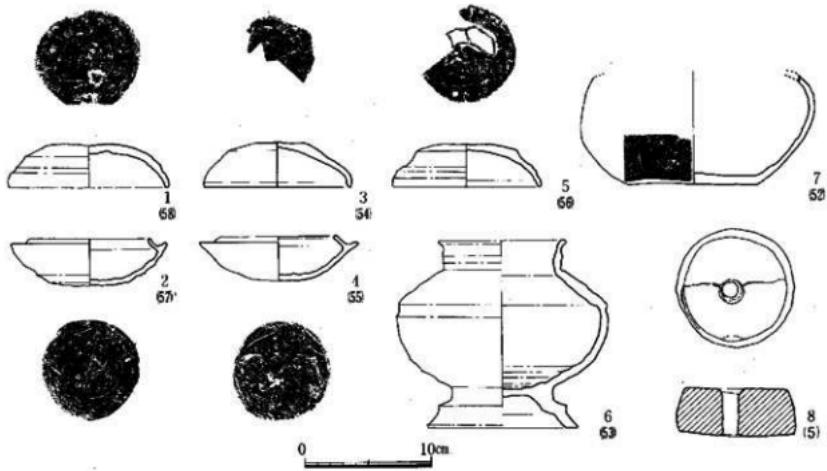
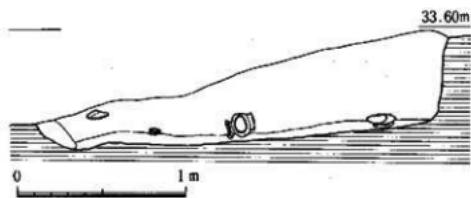
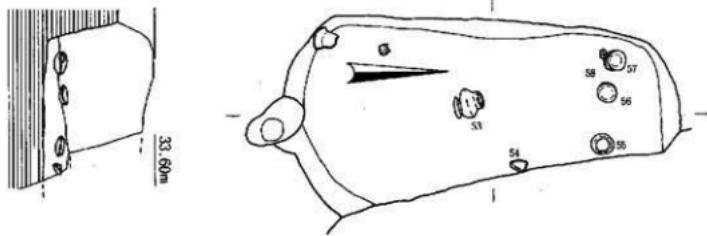


Fig. 21 土塙墓10夾測図 (1 : 30) 出土遺物実測図 (1 : 4 8は1 : 2)

出土遺物 (Fig. 20) 図示した上器はいずれも周溝出土のものである。14は平瓶もしくは長頸壺であろう。やや外反しながら開く。端部は坦面をなす。口径9.4cmを測る。15は小形の短頸壺である。口縁部は極めて短く、直線的に内傾する。頸部と胴部の境には沈線状の段をなす。胴部は肩があり、底部は平底である。底部付近に回転ヘラ削りを施す。口径5.2cm、胴部最大径9.5cm、器高6cmを測る。16は小形の鉢である。口縁部は直行し、底部は丸底である。底部に不定方向のカキメを施す。復元口径8.8cm、器高6.1cmを測る。17は壺底部である。平底で、外面には回転ヘラ削りを施す。底径6.1cmを測る。18は高杯坏部である。口縁は直線的に開き、体部外面に二段の段を持つ。復元口径12cm、坏部高4cmを測る。19は高台付の坏の底部である。高台は外側へ踏張る。復元底径10.2cmを測る。20は土師器甕である。口縁部は短く開く。肩部はあまり張らない。外面は縱方向のハケメ、内面は縱方向のケズリが認められる。復元口径13.6cmを測る。

9号墳 (Fig. 19) 7、8号墳の北側で検出した。尾根筋にあるため削平が著しい。周溝は西側に巡らない馬蹄形を呈する。南側の大部分は削平や搅乱で不明瞭である。復元径は12mほどであろうか。

主体部は中央を試掘の際のトレンチによって削平されている。試掘報告によれば石材などは見られなかったようである。西側に開口する横穴式石室であろう。上部主軸はN-115°-Wを向く。掘方は長梢円形を呈し、長3.4m以上、幅2.3mほどを測る。

出土遺物 (Fig. 20) Fig. 20-21は9号墳周溝出土の平瓶である。頸部を欠く。胴部上半にカキメを巡らす。下半は回転ヘラ削りを施す。肩が張り、底部は安定感のある平底である。胴部最大径14.8cm、同部高8.9cm、底径9.1cmを測る。

土塙墓10 (Fig. 21) 8号墳の東側で検出した。土塙墓と考えられる遺構である。東側半分近くを削平される。長方形に近い梢円形を呈し、長2.35m、幅1.2mほどに復元されよう。深さは遺存のよい部分で0.5mほど残る。内部には比較的多くの遺物が副葬されていた。北端付近の床面に蓋坏と石製紡錘車、中央付近に脚台付壺が出土している。

出土遺物 (Fig. 21) 出土土器はいずれも須恵器である。1、2、4、5は北端付近で出土した。1、2はセットをなす。但し、坏身である2の方が上から被さっていた。1は他の個体に比べて、大井部に比較的丁寧な回転ヘラ削りを施す。これにも焼成時の別個体片が付着している。口径12.5cm、器高3.5cmを測る。2は口縁部はわずかに外反しつつ内傾する。底部はヘラ切り未調整か、雑なナデを施したものである。口径9.3cm、受部径12cm、器高3.7cmを測る。4は坏身である。口縁部は直線的に内傾する。体部上半には回転ナデを施すが、底部はヘラ切りの後未調整か雑なナデを施すのみである。口径8.8cm、かえり径12.2cm、器高3.5cmを測る。5は蓋坏である。天井部はヘラ切りの後未調整と思われ、重ね焼の際の別個体の破片が付着したままになっている。体部は回転ナデを施し、天井部との境に稜が立つ。完存品で、口径11.8cm、器高3.4cmを測る。3は須恵器坏蓋である。7のやや北側床面で出土した。口縁端は丸みを持ち、わずかに折れ曲がる。大井部はヘラ切りの後未調整である。口径11.4cm、器高3.6cmを測る。2、4、5の蓋坏にはすべて弓矢形のヘラ記号が見られる。3は破片であるが、弓形とも見られる記号の一部が残っており、2、4、5と同じ記号であろう。これにたいして、1は2もしくは3本の平行線と直交する1本の刻線から成る記号で、2から5とは異なる。この二者には、天井部の回転ヘラ削りの有無など、技法状の違いも見られる。6は脚台付壺である。完存品である。中央床面で出土した。口縁部は短く直立する。端部は短く外方へ引き出す。肩が強く張り、稜を持つ。稜線から下に回転ヘラ削りを施す。脚台部は貼り付けである。明瞭な段を持つ。口径9.8cm、器高14.8cm、脚端径11.4cmを測る。7は壺あるいは平瓶の胴部である。南端部で出土した。

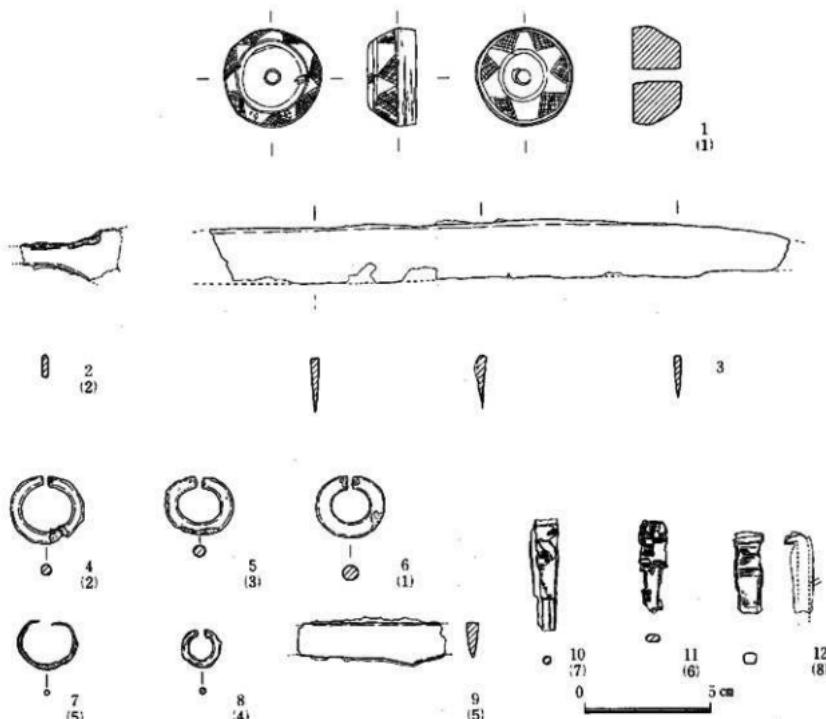


Fig. 22 各古墳出土石製品、金属製品実測図 (1 : 2)

底面からはやや浮いている。肩が強く張り、安定した平底を呈する。胴部下半に回転ヘラ削りを施す。底径10cmを測る。8は石製の紡錘車である。断面が丸みを帯びる台形を呈する円錐台形の紡錘車である。6号墳のものと異なり無文である。

各古墳出土鉄器、装身具 (Fig. 21) 2、3は7号墳主体部出土。同一個体と考えられる。剣身長30cmほどに復元できる鉄剣である。2は関部から茎部にかけての破片である。4から6は7号墳主体部出土の耳環である。いずれも銅芯金箔貼りで、本来2対あったものと考えられる。いずれも初葬面の敷石上から出土した。7、8は8号墳主体部出土の耳環である。7はI面、8はII面出土である。7は鏽化が著しい。8は小形の耳環である。9から12は8号墳主体部出土の鉄器である。9は刀子の関部付近、10、11は鐵鎌の関部から茎部にかけての破片。12は鎌であろうか。

(4) 小結

今回の調査では弥生時代の住居跡1基、土壙1基、貯蔵穴28基、古墳時代の円墳4基、土壙墓1基を調査した。以下に簡単にまとめを行う。

弥生時代の調査としては、前期末から中期初頭の貯蔵穴とほぼ同時期の住居の検出が特筆されよう。從来月限丘陵上では前期に遡る生活関連遺跡は影ヶ浦遺跡、宝満尾遺跡のように貯蔵穴群として検出される例がほとんどであった。月限丘陵の西側の低地には近年調査された雀居遺跡があるが、丘陵上の遺跡群との関連についてはこれから調査に期するところが多い。これに対し該期の埋葬関連遺跡としては、天神森遺跡等が調査されている。また該期以降継続する甕棺墓を主体とする墓地は企限遺跡をはじめ多く知られている。今回の調査で、月限丘陵では貯蔵穴群に住居がともなう例が確認されることとなった。

古墳時代の調査としては、從来月限丘陵上で調査されている諸例と特に異なるところはない。以前に詳細に調査された堤ヶ浦古墳群の編年に従うとⅢB期（6世紀後半）に築造されⅣ期（7世紀初頭代）頃まで追葬されている。また土壙墓10はその位置から見て、8号墳に付隨すると考えられる。古墳に隣接する土壙墓は堤が浦古墳群の分析では、1世代の埋葬が終了した段階からその後に築造され、次世代の家長か、近親者の可能性が考えられている。8号墳は図示した土器は土壙墓10よりやや新しい様相を示すと考えられるが、築造時期はⅢB期に遡ると考えられる。また各古墳とも破壊が著しく、墳丘はほとんど完全に削平されており、主体部も大きく搅乱されていたため、埋葬に関する様々な祭祀行為や、古墳の築造過程に関する情報を得ることはできなかった。

かつて調査された2号墳は小規模な竪穴式石室を持ち、5世紀後半に推定されているこの古墳を含むD群は未調査のまま破壊された3基を含めて、9基まで確認された訳だが、1から5号墳と6から9号墳は立地としては異なる舌状丘陵になると思われる。しかし距離としては指呼の間にあり、丘陵奥から二条の尾根線にそって離起的に築造されていった可能性が高いと考えられる。

図 版



(1) 弥生時代遺構全景（東から）



(2) 弥生時代遺構全景（南から）



(1) 土壙 1 (西から)



(2) 住居跡11 (北から)



(1) 貯藏穴 3 (南から)



(2) 貯藏穴 5 (北から)



(1) 勘査穴 5 遺物出土状況



(2) 勘査穴 7 上層（東から）



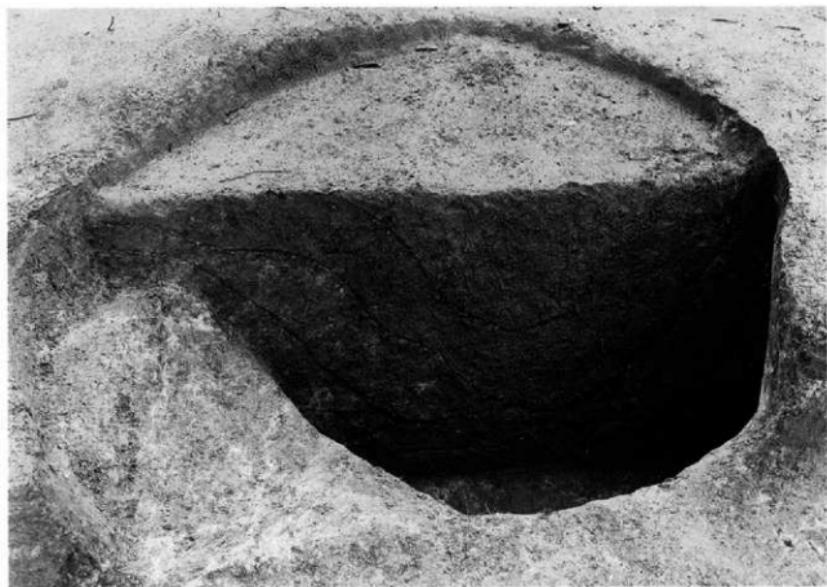
(1) 貯藏穴 7



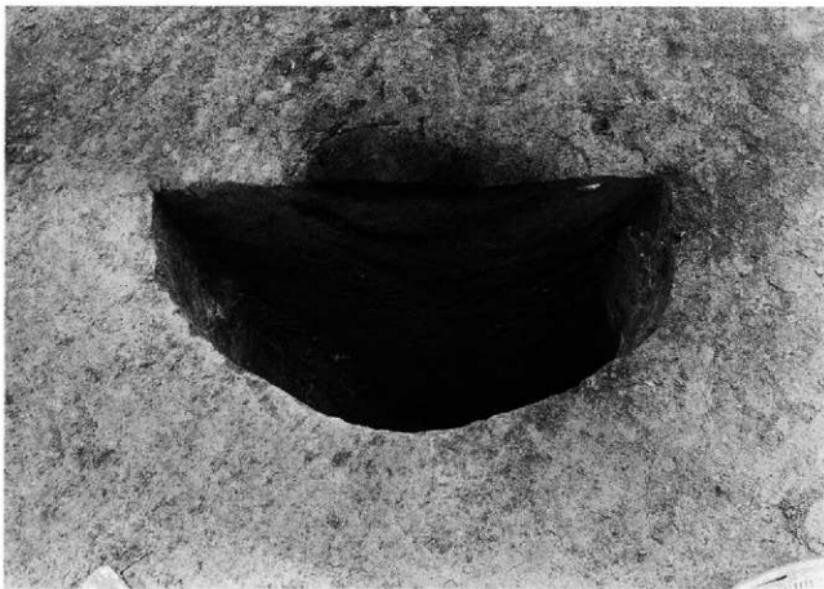
(2) 貯藏穴 9



(1) 貯蔵穴9遺物出土状況



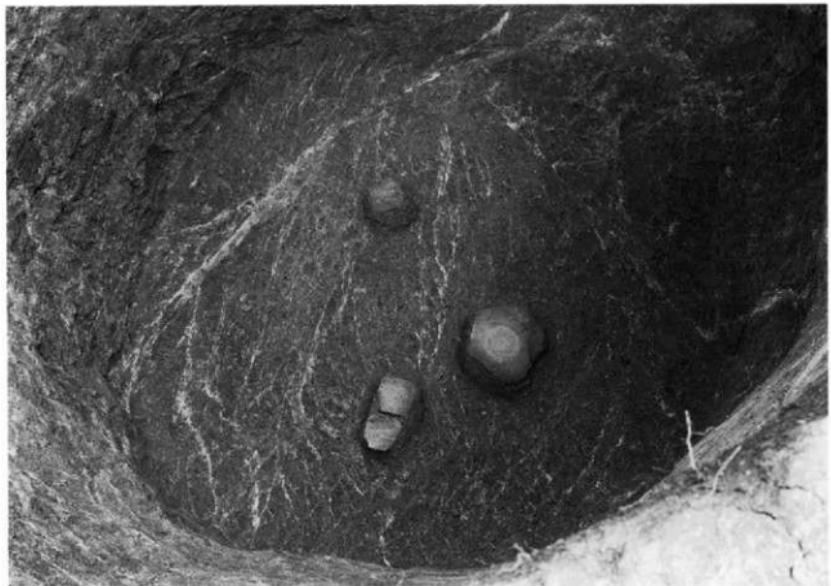
(2) 貯蔵穴12土層（西から）



(1) 勘査穴14土層（西から）



(2) 勘査穴14（東から）



(1) 勢藏穴14遺物出土狀況



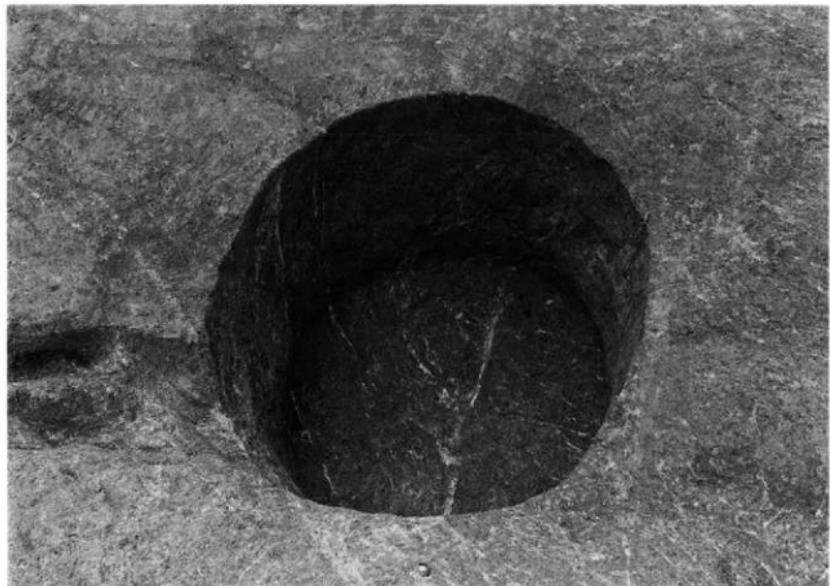
(2) 勢藏穴21



(1) 貯藏穴22



(2) 貯藏穴22遺物出土狀況



(1) 貯藏穴27



(2) 貯藏穴31



(1) 6～9号墳（東から）



(2) 6号墳全景（南から）



(1) 6号墳主体部（西から）



(2) 6号墳紡錘車出土状況（北から）



(1) 7号墳全景（南から）



(2) 7号墳主体部（南から）



(1) 7号埴石室遺物出土状況（東から）



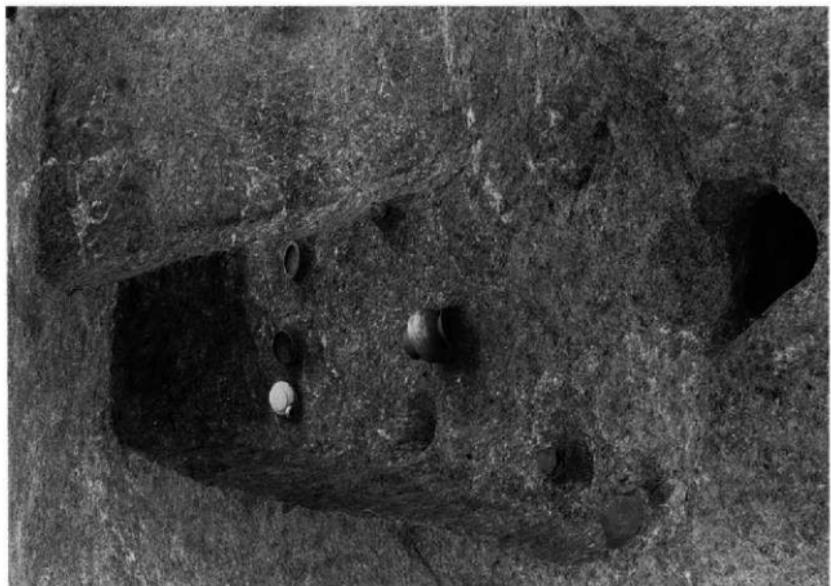
(2) 8号埴全景（南から）



(1) 8号填石室（南から）



(2) 9号填全景（南から）



(1) 土塚墓10（南から）



(2) 土塚墓10、遺物出土状況（南から）

福岡市埋蔵文化調査報告書第445集

持田ヶ浦古墳群2

—D群6~9号墳の調査—

1996年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 福博総合印刷株式会社

持田ヶ浦古墳群2 (福岡市埋蔵文化財報告書第445集)
付 図

